

第29回全国小学生作文コンクール

「わたしたちのまちのおまわりさん」

受賞名：優秀賞（高学年の部）

タイトル：「身近な命を救ってくれた警察官」

氏名：西口 優夏（ニシグチ ユウカ）

小学校名：石川県 加賀市立湖北小学校 六年

その日は、太陽が出ていてとても暑い日でした。友達と学校から家に向かって帰っている途中でした。黄色の信号から赤の信号に変わったまさに、その時でした。一台の車が赤になっても関わらず、猛スピードで走ってくるのが見えました。

「これは危ない！ぶつかる！」と、私が思ったその時でした。それを見ていた警察官が自分の持っていた笛を取り出し

「ピッピッピーー」と、大きな音を出して鳴らしました。私は、この後どうなるかと気になり、その車を運転していた人と警察官を少し見ていました。

私は小さいころから、警察官に対して怖いイメージしかもっていませんでした。

だから、運転手に対して怖い顔をして大きな声で怒って話すにちがいないと思っていました。

でも、イメージしていたのとは違って、優しい顔と声で、運転手と話をしていました。どんなことを話していたかは、離れていたので聞こえませんでした。きっと安全に運転をすることの大切さを伝えていたような気がします。

私は、あの時、警察官に伝えなかった言葉がありました。それは、「笛を鳴らして下さって、ありがとうございます。」ということです。警察官にとって、笛を鳴らすことは、当たり前のことなのかもしれません。

でも、あの時、約五秒判断がずれていて、笛を鳴らすタイミングが遅かったら、私と友達は事故にまきこまれていたでしょう。警察官は、身近にせまった命の危険から、私と友達を救ってくれたのです。

私と友達は、歩行者用の信号が青に変わることを待っていて、交通ルールを守っていましたが、事故にまきこまれる危険性もあるのだと知りました。今までの私は、赤から青に変わったら、「早く、横断歩道をわたろう。」と思っていました。

でも、こんなことがあってから、信号が変わっても、もう一度、左右の確認が必要で、自分の命を守ることは、私自身も気を付けなければいけないんだと実感しました。

私たちが、いつも安心・安全に学校に通うことができているのは、あの日出会った警察官のような方々のおかげです。本当にありがとうございました。

これから、私ができることは、今まで以上に交通ルールを守り、6年間最後の学校生活を楽しく過ごすことだと思います。

まず、できることは、朝の登校班で、下級生に声かけをし、学校への道を歩いていくことです。そうやって、身近な人を少しでも守っていきたいです。